

尊徳と良寛―我が心の師

経済成長が著しい中国で、二宮尊徳（金次郎）の報徳思想が、注目を浴びているという。書物を手に薪を背負った、あの金次郎像さえ建てられていると聞くから驚きである。

尊徳の思想は、日本の資本主義の父である渋沢栄一をはじめとして、経営の神様・松下幸之助やトヨタの創始者・豊田佐吉ら日本の名だたる経済人に大きな影響を及ぼした。彼の国においても、二宮尊徳にこそ学ぶべきものがあると考えたのだろう。

かくいう私もまた、報徳思想を企業家人生の大きなよりどころとしてきた一人である。

分を守り、他に譲る

尊徳が説く報徳思想の根本は、「至誠」「勤労」「分度」「推譲」の四つから成り立っている。

「至誠・勤労」は、感謝と真心を持って汗を流すことが、生きることの基本である、という考え方。非常に分かりやすい内容でもあることから、戦前の道徳教育のお手本ともなったのだろう。

「分度」は分を守る、「推譲」は他に譲る。道徳教育では、儉約と貯蓄、奉仕の勧め。商売においては、勤労と我慢を美德として強調する意味でも広く使われた。戦後の経済成長の原動力となった「勤勉な日本人」を支えた精神ではあるが、私はより深いところに尊徳の思想性を感じている。

一つは、経済が社会を変革し、未来を創造していく力を持つという考え方である。

そこで思い起こすのは、極貧時代のエピソードである。尊徳は、一粒の種を一袋の菜種に育て、これを油に換えて灯りをともし、その下で書を読

つきてうたひて霞たつ
ながき春日を暮らしつるかも

良寛が生きた江戸中期から後期にかけての時代は、商品経済が進む一方で貧富の差が拡大し、大飢饉の影響もあって百姓、町民の不満は膨張し、一揆が相次いだ。太平の世が去って、幕府の改革政策も功を奏しない「空回りの時代」でもあり、どこか日本の現代の姿とも重なって見える。

人心が荒廃した世にあつて、良寛はひたすら諸国を行脚し、僧侶としての高い地位を求めるときもなかつた。難しい説法に代えて詩歌をよみ、托鉢の折に触れては子どもたちと遊んだ。

そんな無冠の風来坊を、江戸の文人は「大徳の禅師」と敬意を込めて呼び、村々の人々は共感と信頼を寄せた。良寛はほんの一時、質素と言うよりは貧しい暮らしを村人とともにしたただけであつたが、彼が去つた後には、家の中に和氣が満ち、村の中にはえもいわれぬ豊かな気分が漂つたと伝えられていた。この感覚は、良寛が残した詩歌や書画を通じて現代の私たちも感じ取ることができるが、そこに込められたメッセージとは一体何なのか。それは、本当の豊かさというものは、人間の心の中にあり、精神の在り方こそが大切なものなのだ、という考え方なのではないだろうか。どこか心に木枯らしが吹きすさぶような現代にあつて、良寛の歌に心がひかれる人がいる限り、「心の村」を取り戻すことも夢ではないと思つた。

私にとつても、良寛は尊徳とともに永遠に「心の師」であり続ける。

呉竹のなほき姿は

偽りのおほかる世にも障らざりけり

竹のように真っ直ぐな気持ち、子どもたちのように素直な心、たわむことがあつても決して折れない気持ちを大切にしたい。